長崎ブリックホール出品者

田　秀敏(昌原)
李　賢珍(昌原)
辛　美花(昌原)
宋　南奎(昌原)
盧　淳天(昌原)
姜　昌浩(昌原)
姜　善英(昌原)
李　正喜(昌原)
呂　閏暻(昌原)
李　星陸(昌原)
許　智虎(昌原)
南　孝眞(昌原)
黃　賢朱(昌原)
孫　慧彬(昌原)
井ノ上 理恵(昌原)
洪　東植(釜山)
申　京愛(大邱)
川田　剛(大邱)
朴　然娥(大邱)
李　男美(大邱)
金　福洙(清州)
林　銀洙(清州)
崔　民建(清州)
李　自連(清州)
李　忠優(清州)
浦川 亜津子(清州)
烏　鳴鳴(内蒙古)
烏　鳴蕾(内蒙古)
井川 惺亮(長崎)
伊藤 昭博(大分)
入江 一樹(長崎)
岩田 桂子(長崎)
岩永 晃典(長崎)
宇野 和幸(京都)
大木 道雄(埼玉)
小栗栖 まり子(福岡)
金子　衛(長崎)
川田 泰子(鹿児島)
岸川 優子(長崎)
木嶋 正吾(東京)
国松　実(長崎)
貞包 智美(長崎)
さとう しのぶ(千葉)
佐藤 千代子(長崎)
三和幼稚園(長崎)
重野 裕美(長崎)
重松 希(福岡)
柴　清文(奈良)
末松　歩(東京)
高島 芳幸(埼玉)
田中 瑛(千葉)
田中 睦治(沖縄)
田端 一征(長崎)
坪田 政雄(茨城)
徳永 玲子(長崎)
永田 典子(東京)
中田 寛昭(福岡)
中村 安次郎(埼玉)
野坂 知布(長崎)
波多野 慎二(長崎)
浜谷 信彦(長崎)
原口 幸三(長崎)
廣岩 裕香(長崎)
深江 嵯成枝(長崎)
藤上　慶(山口)
降田 達季(長崎)
古本 元治(福岡)
前田 真希(長崎)
増田 和剛(高知)
松尾 愛徳(長崎)
松尾 桂子(長崎)
松尾 雄志(長崎)
松尾 美希(東京)
丸山 常生(東京)
丸山 芳子(東京)
森　貴也(大分)
森永 昌樹(佐賀)
守屋　聡(長崎)
山口 昑子(長崎)
山口 直起(長崎)
山口　亮(長崎)
山村 知宏(福岡)
山村 みき(福岡)
山本 伸樹(福島)
吉岡 宣孝(長崎)
吉川 信雄(神奈川)
吉住 利恵子(長崎)
吉田 晴夫(京都)
吉田形 勧(長崎)

支援協力者

兵庫 由紀子
津野 元子
西岡 美貴子
高橋 眞司
岩永 晃典
宇野 和幸
木嶋 正吾
さとう しのぶ
佐藤 千代子
三和幼稚園
国松　実
田中　瑛
田中 睦治
田端 一征
坪田 政雄
永田 典子
中田 寛昭
中村 安次郎
波多野 由美
浜谷 信彦
古本 元治
松尾 雄志
吉田 晴夫
森永 昌樹
山口　亮
吉岡 宣孝
林　銀洙
浦川 亜津子
崔　民建
李　自連
李　忠優
トキ・アートスペース

招待作家

フランシスコ・ラランジョ（ポルト大学教授・ポルトガル）
姜バレム（昌原大学校名誉教授・韓国）
鐘 孺乾（中南民族大学教授・中国）
イヴォネッチ・カヴァルカンチ（アーティスト・ブラジル）

佐藤千代子
井川惺亮
前田真希
波多野慎二
守屋聡
中田寛昭
森永昌樹
野坂知布

表紙写真 /
ナガサキピースミュージアム　「RING ART展」

20周年
春風ながさきより XXI 2019

日葡韓中伯美術交流 彩

長崎市・ポルト市姉妹都市提携40周年
長崎ブリックホール開館20周年記念

長崎ブリックホールギャラリー

長崎市茂里町2-38　TEL:095-842-2002
10:00～20:00
3/19(火)－3/23(土)

含：交流スペース
地球市民ひろば

ナガサキピースミュージアム

長崎市松が枝町7-15　TEL:095-818-4247
9:30～17:30 ※月曜日休館

2/26(火)－3/17(日)
RING ART展

フランシスコ・ラランジョ教授展
3/19(火)－3/24(日) 11:00～12:00

オープニング及び
フランシスコ・ラランジョ教授講演会
3/19(火)
オープニング演奏：中原 大幾（ヴァイオリン）

オープニングセレモニー
（ブリックホールギャラリー入口前）
3/19(火) 14:00～14:30

3/21(木・祝) 14:00～15:30
（ブリックホールギャラリー）
トーク講師 菅 章　SUGA Akira

主催 RING ART　共催 長崎市

後援 長崎県 / 長崎県教育委員会 /
長崎市教育委員会 / 長崎大学教育学部 /
駐日ポルトガル大使館 / 駐福岡大韓民国総領事館
一般社団法人日本ポルトガル協会 /
在名古屋ブラジル総領事館 /
長崎日本ポルトガル協会 / 長崎新聞社 /
朝日新聞社 / 西日本新聞社 / 毎日新聞社
読売新聞西部本社 / NBC長崎放送 /
NCC長崎文化放送 / KTNテレビ長崎 /
NHK長崎放送局 / NIB長崎国際テレビ
長崎ケーブルメディア / エフエム長崎

CAMÕES PORTUGAL

助成 /（公財）長崎県国際交流協会
平成 30 年度草の根国際交流支援事業

「春風ながさきよりXXI2019　日葡韓中伯美術交流彩」記録集
編集・発行　RING ART　発行日　2019年8月
翻訳/井川リベイロ瑠実　E-mail : info@ringart.jp　http://www.ringart.jp

木嶋正吾（多摩美術大学教授）

姜バレム（昌原大学校名誉教授・韓国）

フランシスコ・ラランジョ（ポルト大学芸術学部教授・ポルトガル）

鐘　鳴乾（中南民族大学教授・中国）

中村安次郎（埼玉）

Nagasaki Brick Hall Gallery

2019.3/19tue-3/23sat

創造の場づくりとアートの輪
「春風」と「RING ART」

菅　　章

長崎のアートシーンとの出会いは長崎ブリックホールで行われた現代美術展「2001年ハ長崎カラ」のギャラリートークからである。それはホールの運営を任されていた長崎大学教授の井川惺亮氏の招きによるもので、2004年の同展でも写真家の東松照明氏との対談を務めるという貴重な体験をさせていただいた。あの時会場となったブリックホールは今年で開館20周年の節目の年となるが、現在も長崎の芸術文化の拠点としてさまざまな企画、イベントが実施されている。その後開館したナガサキピースミュージアム（2003年開館・古市徹雄設計）と長崎県美術館（2005年開館・隈研吾設計）も芸術都市長崎を全国にアピールする発信拠点として機能している。

このたび「春風ながさきよりXXⅠ2019」のトーク講師として参加させていただく機会を得て、この都市の持つポテンシャルの高さを改めて感じた。それは文化施設の充実だけでなく、「春風」や「RING ART」をはじめとする地域芸術活動の継続性、発展性、独自性、国際性、連携などに瞠目すべきものがあったからである。

今回、ブリックホールギャラリーの会場に並んだ「春風」の作品群は、いわゆる現代美術の斬新で多種多様な表現であったが、それでいて等身大の日常や風土に根差す地域の課題を自覚した制作姿勢がうかがえた。もちろん、県外（関東、関西エリア）の著名作家や韓国（姜バレム氏）、中国、ポルトガル（フランシスコ・ラランジョ氏）といった招待作家の出品は、展示会場のクオリティーや強度を高めていたが、地元作家と同じ地続きのステージで連携する豊かで多様性に富んだ場の創出にも思えた。それは地域性を大切にしながらアートを通じて人と人とのつながりの輪を広げていくことを目的とした「RING ART」の精神と共通した感性である。

その礎をつくったのが井川惺亮氏であることは誰もが認めるところであろう。井川氏が長崎大学に教官として赴任した1984年頃といえば、地方都市はおろか東京でさえプロジェクトやアートフェスティバルといった地域アートの取組は見られなかった。そのような状況下で、大学での美術の教科教育、実技指導にとどまらず、いち早く地域へのアプローチを開始し、学生や地域を巻き込みながら20年以上活動を継続してきたのだ。展覧会だけでなくワークショップ、壁画、インスタレーション、パフォーマンスなどによるアウトリーチも積極的に推進した。それらの活動は、ある特定のイデオロギーに拘泥することなく、また権威やアカデミズムとも無縁だが、地域や社会と向き合った地道な創造の場づくりでもあった。恐らくそこには絵画という人類にとって本質的な創造行為を通して、そこから派生する世界との関係を知悉した井川氏の世界観が根底にあり、そのバランス感覚が期せずして絶妙な組織運営や運動を実現させたのであろう。

国際交流においても、自らの作家活動と併せて、韓国の大邱、昌原の大学との交流展などで、学生に多くの経験とチャンスを提供した。その後も「春風」展や「RING ART」で中国、ポルトガルを加えた交流の輪を広げた。アートの特質である多様性、寛容性、先駆性に支えられた平和への願いが込められた交流である。それは被爆地長崎が世界に向けたメッセージとも重なる。政治や経済で解決困難な問題が山積している国家間の現状において、アートによる国際的な交流とそこで育まれた友情は、これまで以上に重要な意義をもつであろう。

「RING ART」が掲げる地域・国際・平和は、このグループの＜場所＞＜運動＞＜理念＞を明確に示している。地域で培われた創造性と想像力が活動のDNAとなって、人と人の輪をつなぎ、長崎から世界へと広がり、今後の困難な世界に立ち向かう力となることを信じたい。

（すが　あきら／大分市美術館館長　国際美術評論家連盟会員）

祝　辞

ポルト市長　　ルイ・モレイラ

ポルトと長崎との交流は大航海時代から始まりましたので、とても古くからの友人です。

時を経て今日、ポルト市の姉妹都市である長崎市と協定40周年を迎えました。ポルトガルを代表するアーティストであるポルト大学ラランジョ教授は、これまで10年近く長崎大学井川惺亮長崎大学名誉教授とのアートを通した交流を続けており、両氏は両都市の国際交流の促進に大きな功績を残しています。

今年度の40周年記念の行事の一環として、井川教授と長崎市のご招待により、平和の館であるナガサキピースミュジアムにてラランジョ教授の個展が実現しました。特に講演会の際、長崎の方々から熱心な質問が相次ぎ、とても実り多い時間になったとラランジョ教授自身から伺っています。彼の友人として、またポルト市民として、とても誇らしくまた頼もしく思います。

ラランジョ教授と井川教授の出会いは、ポルト大学と長崎大学が国際学術交流協定を締結した2010年に遡ります。ポルトでの調印式に合わせ、井川教授がポルト大学で個展という形で花を添えてくださったことで、両教授の交流がスタートしました。

井川教授とラランジョ教授のアートの絆が、両市民も巻き込み、ますます深まることを祈念いたします。

祝　辞

長崎市長　田上　富久

この度、20周年「春風ながさきよりＸXI　2019・日葡韓中伯美術交流彩」が開催されましたことを、心からお喜び申し上げます。

今回開催されましたこの美術展は、美術展「春風ながさきより」が20周年を迎えたことを記念して開催されるとともに、長崎市とポルト市の姉妹都市提携40周年と、長崎ブリックホール開館20周年も併せて記念する美術展としてRING　ART運営委員会の皆様が企画され実施に至りました。これもひとえに井川惺亮長崎大学名誉教授、RING ART運営委員会の野坂知布会長をはじめとする関係者の皆様方のご尽力の賜物であり、深く敬意を表しますとともに、日頃から本市の芸術文化の振興に対しましてお力添えを賜り、心から感謝申し上げます。

さらに、今回は、韓国やブラジル、中国から参加された多くの芸術家の皆様の作品が展示されたほか、ポルト大学のフランシスコ・ラランジョ教授や昌原大学校の姜バレム名誉教授、大分市美術館の菅章館長をお招きして講演会やギャラリートークが開催されるなど、美術を通じ、多彩な交流が生まれました。

今後もこのような交流が大切に育まれ、益々盛んになることを心から期待いたします。

最後に、本美術展の開催にご尽力いただきました関係者の皆さま方に感謝を申し上げますとともに、美術展「春風ながさきより」の今後ますますの発展と国際色豊かな交流による友好が更に深まることを祈念いたしまして、お祝いのことばとさせていただきます。

再び、長崎を訪れる喜び

フランシスコ・ラランジョ　（ポルト大学教授）

日出づる国、美しい日本。訪れるたびに深まる、謎と魅力。極東の国、あらゆるものに意味を見出す国を「再発見」するたびに、親しみも増していく。

今回もまた、そのように感じた。ナガサキピースミュージアムで展覧会をとの招待を受け、墨画の、「ある一日」と名付けた一連の作品群を展示した。長崎ブリックホールのギャラリーでの、多くのアーティストとの「共演」（視覚的なことはもちろん、考えも共鳴できた）も、感慨深かった。これらは全て、私の友人であり、非凡なアーティストである井川惺亮先生の寛大さとエレガンスによるもので、例年のごとく今年も「春風展」の成功を祝うことができた。

歴史上で象徴的な「殉教者の街（被爆地）」にアーティストたちが集い、作品を発表することは、地球規模で大きな意味を持つ。

私にとって長崎は特別な場所だ。南蛮屏風に描かれているような、ポルトガル人が遠路遥々たどり着き日本人たちと出会ったことで、二つの国の文化の「出会いの場」となったからだが、東洋から見ても、やはり西洋は果てしなく遠い。日本は、足早に過ぎ去っていく毎日が、理路整然かつ洗練された生き方・考え方の下で確かなものになっていく、素晴らしい国だ。

今回の個展は、講演会を行ったことで更に忘れがたいものとなった。和やかな雰囲気の中、無機質で禅寺を思わせる会場の美しさも相まって、展示している作品はもとより、これまで発表してきた作品を紹介することで、なぜ今回の作品群が生まれたのかをお話しすることができ、さながら回顧展のようだった。

このように、憧れてやまないこの場所に、この文化に、更に近づきたいと切に願う。訪れるたびに新たな発見が待っている、私の想像をいつも超えてくれるこの地に。

ムイット・オブリガード（どうもありがとう）！

長崎市長表敬訪問（2019.3.20）

〈写真上〉（左から）野坂知布（RING ART会長）、姜バレム名誉教授、田上富久長崎市長、井川惺亮名誉教授、井川リベイロ瑠実（通訳）

〈写真左〉Francisco Laranjyo - Um dia assim
（フランシスコ・ラランジョ、ある一日）
ナガサキピースミュージアム個展のために制作された図録。墨によるモノクローム作品が和紙にプリントされ、和綴で製本されている。宮田徹也氏（美術評論家・嵯峨美術大学客員教授）による作品論評も掲載。
ディレクター：井川 惺亮
翻訳：井川リベイロ 瑠実
デザイン・出版・製本：Apolo (Portugal)

イヴォネッチ・カヴァルカンチ（ブラジル）

李 忠優（清州）

李　男美（大邱）

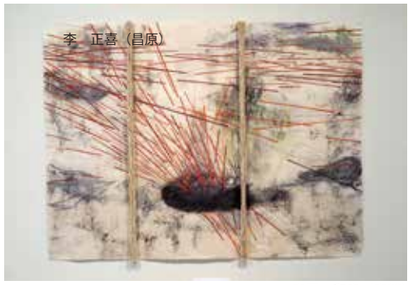
永田　典子（東京）

黄　賢朱（昌原）

丸山　芳子（東京）

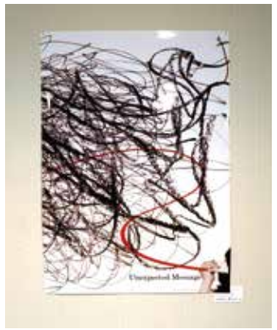
林　銀洙（清州）

末松　歩（東京）



宇野　和幸（京都）

山口　昤子（長崎）


洪　東植（釜山）

重松　　希（福岡）

丸山　常生（東京）

浜谷　信彦（長崎）

孫　慧彬（昌原）

深江　嵯成枝（長崎）

松尾　雄志（長崎）

岸川　優子（長崎）

さとう　しのぶ（千葉）

李　自連（清州）

崔　民建（清州）

大木　道雄（埼玉）

田中　瑛（千葉）

高島　芳幸（埼玉）

松尾　桂子（長崎）

吉住　利恵子（長崎）

岩永　晃典（長崎）

吉川　信雄（神奈川）

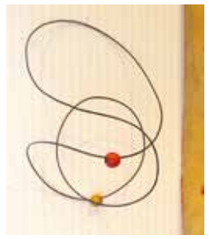
松尾　美希（東京）

伊藤　昭博（大分）

吉田形　勧（長崎）

朴　然娥（大邱）

田　秀敏（昌原）


盧　淳天（昌原）

金　福洙（清州）

川田　剛（大邱）

李　賢珍（昌原）

申　京愛（大邱）

降田　達季（長崎）

浦川　亜津子（清州）

姜　善英（昌原）

森　貴也（大分）

柴　清文（奈良）

徳永　玲子（長崎）

松尾　愛徳（長崎）

金子　　衛（長崎）

李　正喜（昌原）

李　星陸（昌原）

貞包　智美（長崎）

南　孝眞（昌原）

古本　元治（福岡）

岩田　桂子（長崎）

国松　実（長崎）

吉岡　宣孝（長崎）

許　智虎（昌原）

坪田　政雄（茨城）

山村　知宏（福岡）

原口　幸三（長崎）

田端　一征（長崎）

小栗栖　まり子（福岡）

山口　直起（長崎）

吉田　晴夫（京都）

呂　閏曝（昌原）

重野　裕美（長崎）

姜　昌浩（昌原）

宋　南奎（昌原）

辛　美花（昌原）

ギャラリートーク
Gallery Talk

菅 章氏（大分市立美術館長）による講演会とギャラリートークの様子（2019.3.21）

地球市民ひろば
Global Citizen's Square

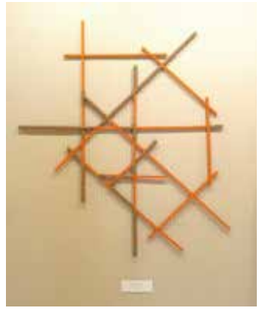
ブリックホール２F「地球市民広場」のスペースにRING ARTメンバーの作品を展示しました。通常は作品展示できないスペースですが、春風展において試行的に展示を試みました。

烏　鳴鳴（内蒙古）

烏　鳴蕾（内蒙古）

川田　泰子（鹿児島）

山口　亮（長崎）


山村　みき（福岡）

山本　伸樹（福島）

田中　睦治（沖縄）

増田　和剛（高知）

藤上　　慶（山口）

入江　一樹（長崎）

井ノ上　理恵（昌原）

三和幼稚園（長崎）

長崎ブリックホール　(2019.03.21)

(写真右)　左から、井川惺亮名誉教授(長崎大学)、北山信博氏(長崎ブリックホール館長)、高橋純子氏(長崎日本ポルトガル協会事務局長)
フランシス・コララランジョ教授(ポルト大学)、加藤 邦彦(長崎市副市長)、姜パレム名誉教授(昌原大学校)

フランシスコ・ララランジョ教授(ポルト大学)挨拶

まず初めに、ご来賓の皆様と会場にお越しの全ての皆様にお礼申し上げます。
この度は、「春風ながさきより」展の20周年及びにブリックホール開館20周年、ポルト市と長崎市の姉妹都市提携40周年の節目の年に、ポルトのアーティストの代表として、憧れの長崎に居られることを心から有難く、誇りに思います。
井川先生との出会いは、2010年に遡ります。2010年、日本・ポルトガル修好150周年の記念の年に、ポルト大学と長崎大学は学術提携を結び、その際長崎からやって来たのが井川惺亮先生でした。ポルト大学芸術学部の食堂の一角が、井川カラーで華やいだ日を、よく覚えています。9年の月日が流れ、その間長崎に来たり、ポルトに来てもらったり、交流が続いています。「春風展」をポルトで開催した年もありました。
春の訪れを告げる爽やかなそよ風のような、それでいて地元はもちろん世界中からたくさんのアーティストが参加する、素晴らしい展覧会です。参加できることをとても光栄に思います。「春風展」とRING　ARTの益々の発展と、ポルトと長崎のアーティストたちの交流の益々の活性化を祈念いたします。

姜 バレム名誉教授(昌原大学校)挨拶

今年も長崎で春風を感じています。井川惺亮先生との出会いから30年、大学間交流から、学生交流へと和(リング)を広げていき、現在では両国の国際交流展へと発展しています。その元になるものは、お互いの芸術活動です。現代代美術は、作品の相互理解から相互信頼の域へと達しています。
私は今年、大学を退官することとなりました。今年の新春に昌原大学で退官記念展を開催しました。その展覧会へ井川先生を招待し、参加して頂きました。作品を通して語らうことができ、その時間を忘れることができません。RING　ARTの活動は私たちと方向性を共にして、同じ向きに歩んでいることを確信しています。今、韓日関係に必要ものは、このような人と人の交流だと思います。

出品者の声
Artist's comment

本展に県外から参加し、ギャラリートークにご出席いただいたアーティストたちによる寄稿文です。

ブリックホールは、穏やかな風に今年も包まれていました。
ナガサキピースミュージアムへ向かい、フランシスコ・ララランジョ氏の手漉の美しい紙に描かれたドローイング作品に出会うことができました。和紙に興味をお持ちのようで「紙談義」となったわけですが、紙といった素材だけで国を超えて共有できるアートの力は素晴らしいですね。スライドレクチャーではポルトの美しい風景、コンセプトや素材に対する思いを深く知ることができました。再びブリックホール会場へ戻り、姜バレム教授のギャラリートークや井川先生のお話を懐かしく拝聴しました。
井川先生との出会いは、先生がマルセイユから帰国され東京国立市の旧米軍ハウスにお住まいの頃です。ご近所といったこともあり、友人からフランス帰りの一風変わった画家がいるといったことで紹介されたと記憶しています。私は東京藝大の学生でして井川先生が講師として就任されることとなり、さらに身近にお付き合いさせていただくことになりました。それから私が郷里の福岡に帰り、先生は長崎大学に赴任されまして私に版画講座を受け持たせていただくこととなりました。当時、先生は地域社会に深く関わる芸術活動を積極的に行うパブリックアートのパイオニアでした。現代アートの先端である今日のソーシャルアートの基盤となりました。
ブリックホールでの展示はとても居心地がよく、また何時でも新鮮です。多くの展覧会に関わってきましたが、こんなに自然体で居心地の良い場はなかなかありません。画力より画格と言いますが、野坂氏はじめスタッフの皆さんと、井川先生の人徳であると思います。長崎の地より世界へ、平和を発信するアーティストの仲間に入れていただき幸せです。

古本　元治　Motoharu Furumoto / 福岡

オープニングセレモニーの時、折しもギャラリー階下のホールで行われていた大学卒業パーティの喧騒が空間に響き渡っていた。若者たちが発散するエネルギーの大きさに、いわゆる展覧会が置かれている難しいポジションが炙り出されている気がした。
アートが発する力の意義とは？　無論、このような現実と拮抗する強さが単純に求められるとは限らない。人々が生きる場に呼応しつつ、制作・作品の存在感をどう獲得していくか、その絶えざる問いかけを内在的に継続させていくことが肝要だろう。RING ARTの活動には、そこをなんとか一歩踏み出そうとする工夫が感じられる。そのエネルギーをこれからも途切らせないことを期待している。

丸山　常生 Tokio Maruyama / 東京

RING ART、そして九州

2011年に福島が原発事故の被害を負い、「ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ」と連ねて語られるようになって以来、福島生まれの私は、改めて長崎の人々の心情を想像する。同様に、水俣病被害者への差別解消の道のりは、福島にとっても学ぶべき先例に思える。
かつて、道の奥の果てと表現された東北と、南西の端と見なされた九州には、「えみし」と「くまそ」とよばれた先住の人々がいた。私は東北人との対の関係として、このような歴史やアイデンティティを内包する九州人に興味とシンパシーを感じている。RING ARTに参加して、平和を願い、互いが共鳴し共存する輪の中に作品を置き、展覧会と九州の旅の全ての共鳴を感じていた。

丸山　芳子 Yoshiko Maruyama / 東京

言っていることと、やっていることがズレている人に説得力があるだろうか？　これを「言っていること＝作品」「やっていること＝アーティスト」と置き換えてみる。
作品のコンセプトがどんなに美しくても、そこにそのアーティストの人間の部分の美しさが伴っていなかったら、そんな作品に説得力はないと私は思う。それでももしかしたら、人の目は誤魔化せるかもしれない。でもきっと、人の心には届かない。作品と、私自身の試行錯誤をやって10年。「ズレがない」までには遠いが、接点は見えてきた。出展した作品は、そんな接点を初めて感じた作品だった。
今回参加して、このような大きな節目の回に私のアーティストとしての小さな節目を並べさせて頂いた気持ちでいる。そして作品と共に作り手の話が聴けたことは大きな学びがあった。私が目指すところを私よりも先に生き、表現し続けているアーティストと出会えたことが嬉しい。
最後に、この展覧会を紹介して下さったトキアートスペース主宰のトキノリコさん、井川惺亮先生、おふたりの長いご縁に感謝申し上げます。

末松　歩　Ayumi Suematsu / 東京

「春風ながさきより」展に初めて出品しました。設置の日、RING ARTの皆さんと心得ておられる地元の方々の対応力は凄く、作品待ちの時間は談笑する楽しさもありましたが、いざ設置となると届いた作品の形状にとどまらず、作品の命を大切に迅速に展示方法を決め、動かれていて驚きました。ご配慮あって遠くに住む友人の隣に私の作品を設置できました。井川先生には作品をよそよそしく置くのではなく、一歩踏み出させたら全体の場の宇宙と共鳴するという技をみせて頂きました。
初日、会場をぐるっと見廻してそれぞれ違う国、地域、人生経験、作風の作品が堂々と同じ回廊に並んでいることが私には衝撃的でした。美術でも優劣をつけられることが多い今、差異をとっぱらい作品と作品とが軽やかに手を取り合っているような印象でした。別会場でのラランジョ先生の講演会、ここでの姜バレム先生のお話と出品者のトークの場でも、作品をつくる人として深く頷き合い、考えを述べ、笑い合えるという、あつく、あたたかい場でした。このような光景はすごく大切なんじゃないかと思いました。

重松　希　Nozomi Shigematsu / 福岡

RING ARTは挑発する

先日渋谷で、ドキュメンタリー映画『ヨーゼフ・ボイスは挑発する』を鑑賞した。戦後ドイツの芸術家、ヨーゼフ・ボイスは、「与えられた」ものとして受容された体制や文化を市民一人ひとりが見直し、対話と議論を重ねることで、真の民主主義が創造されるべきだと挑発した。その情熱と行動力に強い共感を覚える。
近年になく猛暑となった2015年8月、RING ARTが主催する『被爆70年を考える現代美術展 RING ART P&L 2015』に参加した。1945年8月9日11時2分、原爆が長崎に落とされ、爆心地から500m付近にあった鎮西(ちんぜい)学院の職員9名、生徒132名が犠牲になった。その遺構が今も残る活水高等学校・中学校の中庭に渦巻き状の穴を穿(うが)ち、謂(いわ)れのある桜の枝を型取って創りためた蠟燭型作品群を犠牲者と同じ数だけ設置した。地下深く「恨(はん)」として潜行する原爆犠牲者のあまたの魂に、私はこのとき邂逅した。
『春風ながさきよりX XI 2019』で100点に及ぶ美術作品が展示された。これらの作品それぞれが語るメッセージに鑑賞者一人ひとりが耳を傾けることが、ひいては、ヨーゼフ・ボイスが切望した民主主義の源泉になる。RING ARTの20年に及ぶ活動は、アートが社会と繋がる一つの軌跡を厳然と示したと言えるだろう。

大木　道雄　Michio Oki / 埼玉

春風展20年のアート力、それは継続とインスタレーション考

井川 惺亮

60年代後半、私が通った大学は黙々と制作するところだった。70年後半、フランス留学先の美校では自作の主題と説明を常に求められた。長崎に来た84年、倉庫群の一隅で個展をした折、海の波間に自作が並ぶ光景は東京では味わえないアートのLIVE感を持った。いつしか大学教育の職場で「美術は学生から学ぶもの」と教えられた。あれから35年が経過した今、「長崎において美術が平和と同じくらい、どれほど大切かを考えながら、人々に作品を見てもらうために創り手として、どれだけ踏ん張れるか」や「インスタレーションによるLIVE感とは？」を、かつての教え子有志らが結束したRING ART（以下RAという）の仲間と話し合う。

今回はポルト大学のラランジョ教授と美術評論家の菅館長（大分市美術館）をお迎えして、トークと出品作の鑑賞を学びの場とした。また参加者が県内よりも県外からの方が多く、韓国からも多数の参加となり、計90名を越える規模となった。展示場のブリックホール（以下館内という）ギャラリーはこれまでの本展参加者が最大50人で展示会場は満杯状態だった。90名の展示となれば不可能。市に館内の空きスペースの使用許可を求めたところ、１階の交流スペース（元レストラン跡を再利用した）などの許可が降りた。許可条件として作品展示時に職員の立会いと会期中にアンケート調査用紙（市民の声）を設置することとなった。条件が出されても交流スペースは本来のギャラリー機能がなく、釘打ちも禁止。でもね、使用例の前例がない特別な許可と言われるが、その最初の試みを市がこれまで廃れて行く市場（いちば）などをギャラリーに仕立ててきたRAに任せたのは懸命であり、画期的な判断だと言える。

この市民の憩いの場に軽音楽を流すような感じで、RAは展示可能な軽量の作品を基に、軽快なインスタレーションを展開し、LIVE空間に仕立てた。こうして憩いの空間は、家族で鑑賞し合う場面や高校生らが作品の前でインスタ映えの撮影を随所に日々試みる姿は、今まで見ることのなかった風景となった。それに掃除のおばさんが「潤いが出たとね」とエールを送って下さった。今、正に現代美術の作品だからこそ役立てるアートの使命を感じた。元々古来より人の感性は東西を問わず、このようなコミュニティや公共空間、何よりも憩いの場、あるいは現代では、悩めるまたは病などの場、病院ロビーや老人ホームなど何でもない空間に、各々作品をさりげなく設営することで、心の癒しとなり、楽しい場を設営して来た。それがアートの役割や理念だった。

場が変わって、インターネットの時代に反映した思わぬ出来事があり、共有したい情報なので一筆する。ある報道記者から、「折角の取材記事が出来上がったのに、記事差し替えとなった」と伝えられた。その原因は、「本展の会期がネット上（RAのHPや市報のHPなども含まれる）とRAの案内状とが違っていた」ことに編集部が指摘したらしい。それに加えて案内状（DM）のデザインも分かりつらさがあったこともマイナスにつながったようだ。以上からRAでは、今後は分かりやすいデザインで案内状を作成すると共に、ネット上での書き込みには細心の注意をすることとなった。

さぁ、元に戻り美術はとても大切であり、発表の場をRAはインスタレーションでどんな場所でも常に生き生きとした空間の設営となるよう踏ん張りたい！

（現代美術家・長崎大学名誉教授）

交流スペース
Communication Space

今回の春風展では、長崎ブリックホール１F「交流スペース」に、RING ARTメンバー作品を中心に展示しました。 このスペースは、普段は市民のための憩いのスペースとして解放されています。今回初の試みとして、試行的に春風展の会場として使用しました。

20周年「春風ながさきより」に寄せて

長崎市文化観光部長　股張　一男

今回の「春風ながさきより」は美術展の20周年に、長崎市とポルト市の姉妹都市提携40周年、長崎ブリックホール開館20周年も併せて記念する美術展として実施されました。開催にあたっては、長崎市が共催させていただき、ブリックホールギャラリーでの展示に加え、ブリックホールの空間活用の試行的な取り組みとして、交流スペースや地球市民ひろばにも作品を展示していただき、たくさんのブリックホール来館者に美術展を楽しんでいただくことができました。本美術展の開催にご尽力いただきました関係者の皆さま方に感謝を申し上げますとともに、「春風ながさきより」の今後ますますの発展を祈念いたします。

（写真上）　オープニング演奏　中原幾大（ヴァイオリン）

広報
Public Relations

西日本新聞　2019年３月23日（土）掲載記事

広報用DM（フライヤー）　左：表面　右：裏面